

自己喪失とスピリチュアリティ

自己を求めて

窪寺 俊之*

要 旨

この論文は現代人の自己喪失の問題とスピリチュアリティの関係を検討し、現代人の幸福の道を探ろうとするものである。今日「自己喪失」に関係する社会問題が多発し、その解決の道が探られている。自殺、殺人、引きこもり、精神的病気などの問題の根底には、社会の急速な変化・情報過多・価値観の多様化が原因で、自己を見失って起きたと考えられるものが多い。この論文は自己喪失の原因とスピリチュアリティの関係を明らかにし自己回復の道を探ろうとするものである。

自己喪失の原因は多角的方面から考察されているが、ここでは心理的側面に焦点をあて、次の4つの視点から考察する。1 自己拡散、2 自己内面の希薄さ、3 信じる能力の低下、4 自己否定する自己。

それらは、自己の快復（癒し）という課題を抱えているので、スピリチュアリティのテーマと言える。スピリチュアリティは、目に見えない世界（時、場所を越える世界）に自己の存在を位置づける新しい秩序（生の枠組み）を見つけ出して、癒しをもたらす機能である。自己喪失から回復して人間らしい生き方の可能性を開くものである。

「新しい秩序」を与えるスピリチュアリティの特徴は、ここでは次の3つの点に絞って考える。1 超越性・究極性の問題、2 きちっとした枠組み、3 無条件な受け止め枠。

現代人は、今スピリチュアルなものに回帰し始めている。スピリチュアルな現実との関係から与えられる確かさ・自由を求めている。

キーワード：自己喪失、スピリチュアリティ、新しい生の秩序、癒し、自分らしさ

*関西学院大学

1 はじめに

この論文は現代人の自己喪失の問題とスピリチュアリティの関係を検討し、現代人の幸福の道を探ろうとするものである。今日「自己喪失」に関する社会問題が多発し、その解決の道が探られている。自殺、殺人、引きこもり、精神的病気などの問題の根底には、社会の先行きの変化に適応できずに、自己を見失って起きたと考えられるものが多い。現代人が抱える精神的問題の根底には自己喪失の問題と関わっている。この論文は失った自己にスピリチュアリティがどのように関わっているかを明らかにし自己回復の道を探ろうとするものである。

スピリチュアリティの研究は、宗教学者・心理学者のみならず、社会学者、更には医療関係者に至る幅広い研究者によって盛んに行われている。その背景には、今日、現代人の心の奥にある魂の渇きを満たすものとしての期待が込められている。都会の大型書店の宗教の書棚は、既存の宗教書は消える一方で、精神世界・霊的癒し・スピリチュアルな世界など癒し系と言われる書物が並べられている。

このようなスピリチュアルなものへの関心は、最近、特に目立っているが、最初の起こりは WHO の健康の定義の見直し（1998 年）が契機になっている。それは、丁度、バブルの崩壊による社会規範、家庭、企業の崩壊によって人々が、それまでの生活の基盤や絆を一挙に失いショックの後、自分を見付け直したいという切なる期待が起きてきた時期と重なっている。

バブル経済崩壊はそれまで営々と築いてきた社会の基盤を根底から崩すものとなり、社会という枠の内にあった家庭・学校・企業も音を立てて崩れ去り、自分を支える基盤を失ってしまったというような急激な変化であった。人々は、一夜が過ぎて目がさめると、生活の基盤が奪われ、家族も会社も失って唯一人が立ちすくんでいる自分を見出したのである。それほどの急激な変化であった。単に孤独というのではなく、独りぼっちという心理的問題ではなく、生活の基盤を支えていた社会が崩れて谷底に落ちたのである。かつて問題になったような個人的な孤独感というような感傷的なものではな

く、自分の全存在が社会もろとも崩れて、自分の存在が消えてしまいそうな危機に直面した。社会の指導者も一般人もこの事態への解決を見つけ出すことが出来ずすべての人にとって将来の先行きが全く見えない状態であった。それは単に心持ちを変えれば解決できるというような単純なものではなく社会構造全体が崩壊するという危機であった。このような状態の中で、社会とは何か、私の人生とは何かという哲学的問題を考える人たちがいた。また襲って来た危機が生土台全体を揺り動かすものであったので、生まれたことを後悔する者もいた。その破壊力は人間としての基本的能力である感覚、思考力、人々とのコミュニケーション能力を一気に奪い取ったので、ある者は現実の厳しさに耐えられず自らの生命を絶った。ある者はいつまで続くか分からない苦みのなかで自らを見失い精神科医の治療を受けなくてはならなくなった。

そのような状況の中で助けはあったのだろうか。生きるための光をどこに求めたのだろうか。一時的、対症療法的解決ではなく、根本的解決方法はどこにあったのだろうか。

そのような状況の中で人々は手当たり次第に新たな道を探したが、宗教に助けを求めようとする人は少なかった。日本人の多くは既存の宗教への信頼を失っていた。伝統的伝道方法や布教活動に対して人々は関心を示さなかった。いやむしろ、オウム真理教事件や宗教を名乗った詐欺事件や更には宗教者によるセクシャル・ハラスメント事件を新聞、テレビで知った人々は宗教に警戒心をもった。そして、宗教の代わりに、偽善教団や洗脳などとは多少無縁に見えるスピリチュアル・ヒーリングや癒し系と呼ばれる書物や音楽、映画や絵画に関心を寄せたのである。

スピリチュアリティへの関心は以上のような時代的背景の中で起きてきた。人々は傷ついた心を抱えて、癒されるもの、魂に生命を与えてくれるもの、将来に希望を与えてくれるものを求めて来た。癒し系の音楽や書物が盛んに公刊されて、人々の目がそれらに集中したのはその現れである。傷ついた魂の一時的癒しを求める者もいたし、自分の運命を知りたいと願う人もいた。そして、スピリチュアル・ヒーラーや霊能者や占い師がもてはやされ

た。このようなスピリチュアル・ヒーラーや霊能者は普通の人間の能力以上の能力をもつと自称し、超自然的能力で運命を透視すると自称した。そこには傷ついた自分の生きる目的を失った現代人の迷いと不安を目に見えない世界に求めようとする姿に現れている。物質的世界を超えた世界に救いを求めたのである。自分の人生に自信を持たず、不安と迷いの中で、自分を受け止めてくれるものを、人間の力を越えるものに助けを求める願望が見てとれる。超能力、霊能者、占いなどへの関心が高まったのは、その為である。そしてその原因の背後には自分の人生に自信を失い、迷い、不安になっている現代人の自己喪失がある。

2 自己の喪失

ここでは自己喪失を4つの視点から考察してみる。

2.1 自己拡散、自己分裂

現代人の自己喪失の特徴の一つは、「自己拡散」「自己分裂」的傾向が強いことである。多くのことに一時的関心を示すけれども、長続きせずに止めて、次のものに移っていく。その原因には現代の情報化社会の中での情報過多がある。洪水のような情報が溢れてきて人々の興味を刺激する社会である。現代人は興味を刺激されるが自分の本当の興味や関心を探し求めて歩き回り、いろいろなものに手を染めるが、結局は本当の自分の興味が分らず去っていく。一つのことに集中して長時間に亘って、それに熱中し吟味し、味わい、楽しむことが少ない。

このように興味を常に刺激する原因は、現代の経済構造が大きな影響を与えている。今日身の周りには物が溢れている。それは次から次に新しいものが送り込まれてきて、人々の目にふれるような経済システムになっている。新しいものを開発し、生産し、市場に送り出す企業は、出来るだけ大量に販売するために価格を下げて、すべての人が購入しやすいようにする。新しいものを購入しても数カ月後には、更に新しいものが送りだされてきて、古い

モデルは使い捨てにされてしまう。このような社会では新しいものに人々の興味は刺激され多角化し、ついにはどこに自分の本当の興味があるのかさえ掴めなくなり「自己拡散」してしまう。

また、このような「自己拡散」「自己分裂」を引き起している原因のもう一つは、価値観の多様化も起因している。現代社会には、幾つもの価値観が併存している。情報システムの拡大によって、世界中の情報が同時に送られてくる。様々な情報手段によって実に多様な民族、文化、習慣、生活形態があり、かつ価値観が存在することを知らせてくれる。消費を善とする文化もあれば、それを悪とする文化もあって同じ地球上で異なる価値観が併存し、ときどき対立が起きる。一つの価値観を大事にして来たのに、別の価値観が入り込んできて、古い価値観と対立し、葛藤し、どちらの価値観で生きるべきかで戸惑い、迷い、悩むのである。複雑化した社会では、選択肢が多すぎて判断に迷い、自己分裂を起こしてしまう。どの選択肢を選んでみても文化や経済状況の異なる価値観から見れば、批判されるかもしれない。また、どの選択肢を選んだとしてもそれが完全な選択ではないと思うと、不安がつきまとい、結果としては自己分裂してしまう。現代の情報過多と多様な価値観が生み出す現代人の苦悩である。

2.2 自己内面の希薄さ

今日の社会は、人間が追いつけないほどの急速なスピードで変化が起きている。その社会に住む人は、環境的变化を把握し、適応する為に、多くの集中力と時間と労力を使っても追いつけない程の急速な変化である。その為に自分の内側をしっかりと眺め、理解し、育てる時間と労力がない。つまり、限られた集中力、時間、労力をほとんど外的環境の情報収集と理解のために使い果たしてしまい、自分の内的世界を養い育て、確立する為の時間と労力がない。環境の急速な変化は、個人の適応能力を遥かに越えるスピードで起きているので、環境の急速な変化と、それへの適応能力とのギャップがますます広がっていく傾向にある。適応能力の足りない人は、時代の変化から乗り遅れたという感覚、環境から振り落とされたという感覚や生活共同体から

離れたという疎外感を感じてしまう。そしてどこにも安らぎを見付けられず、親しみをもつものが生まれない。現代人のもつ人間関係の複雑化と表層化が個人の内面的世界を希薄にしている原因の一つである。内面的世界とは、他者と親しく交わることで養われ、また自分や他者、人生の喜びと苦難、死や永遠について時間をかけて思索し、取り組むことで育つ世界である。現代人は人と触れ合い、書物を読み、歴史を考え、自然に触れ合うことが少ないのである。このような自己内面性の希薄さは現代人の自己喪失の一因になっている。

2.3 信じる能力の低下

現代文化は知性や理性が重視されているけれども、それに対して感性や悟性（洞察、気付き）や信ずる（任せる）能力が養成されず、軽視されている時代である。知性や理性が科学技術の発展をもたらし、経済的に豊かな社会の形成に貢献したので、その能力を追求する社会が生まれ、更には能率や効率を導き出す学問が重要視された。科学や経済の発展は、人間の物質的豊かさや生活の便利さをもたらせたが、精神的満足や幸福感を必ずしももたらせたとは言えない。

科学の発展や経済発展は、現状の生活に満足せずに新たなものを開発することが根底にある。常に現状の不備・欠点・不便さを見つけ出す努力を惜しまない。現状を疑うこと、満足しないことで、新たな発展・前進があると確信している。このような生き方は、単に企業だけではなく学校でも、家庭でも、一般化傾向にあり、疑うことが善だという信仰さえ生み出している。

企業に働く従業員は、現状に満足することは発展・進歩を妨げることだと信じている。その為に、現存の製品、職場環境、生産システムの不備を探して改善・改良することに努める。職場での人間関係もいかに能率よく人を動かせるかという視点から「人を生産手段」として管理している。そんな職場環境の中では、人を信じるということは起こり得ない。自分が利用されないように自己防衛し、かつ上司や同僚を警戒することを身に付けていく。

学校教育はかつて教師、学生生徒、保護者との信頼関係の中で成立してい

たのだが、現状は変わりつつある。教師が暴行を加えて生徒を怪我させることもあるし、親が我が子を殺すこともある。子供が親や教師に暴力をふるって怪我をさせ、あるいは殺傷する事件も起きている。子供は親も教師も信頼できない。教師や親も子供たちをそのまま信じられない。

このような事態は、大人も子供たちも信頼すべきものを失い、疑うこと、警戒することを学ぶことになる。信頼するという行為は、信頼する対象である教師・親・大人・友達・家庭・学校・企業・社会・科学・思想を信用することであり、それらのものが危害や損害を与えないという信仰の上に成り立つものである。それらが危害や損害を加えないし、むしろ、疑わずに受け入れることが出来ると受け止めている。自分を任せる、ゆだねることが出来るものとして受け止められている。自分をゆだねることが出来るということで、人は所属感・一体感や安心感をもつ。このような疑わずに信頼する、信ずる、任せることが人には必要である。人が社会や学校、家庭の一員として安心して生きるには人の中に信頼して任せるという感覚が育つ必要がある。その信頼する対象が、今、失われてしまっている。教師、親、大人、友人も信じられない対象となっている。そのために信ずる能力が育たず、ただ、疑って、その疑いを自分の内に抱え込んで不安を感じているのではない。このような不安は心の統一を失わせて自己分裂の原因となる。

2.4 自己否定する自己

現代人は身近にある親・教師・友人など信ずる能力を失うと同じように、自分自身を信じられなくなっている。言い換えると、現代人は自分自身への自信・信頼を失っていると言える。能力や効率で人間の価値を測る傾向の強い現代社会は、あるがままの自己に満足しようとしめない。能力があって成果を上げたとしても、更にそれ以上の能力をもつ人と比べて、自分は劣っていると評価してしまう。自分を受容するとは、あるがままの自分を信じることである。にも拘わらず、自分を能力で測ってしまうので、存在としての人間をそのまま受け入れることをしない。人と比べて能力のない自分は価値がないと評価し、自分を受け入れることを善としめない。自分のあるがままの能

力を適切に評価し、それを認め、良しとして受け入れることが自分を信じることだ。能力や活動で評価することを止めて、その人自身の存在を承認し、人間としての価値を信じ続けていくことが重要である。それができるには目に見えない評価規準が必要になる。しかし、その評価規準を現代人はもっていない。

先に、現代社会の価値観の多様性に触れたが、価値の多様化が選択の困難性を引き起す原因になっている。現代人は自分で結論を出して責任を負うことに躊躇する。たとえ、結論を出しても人の評価を心配する。現代人には外部の人間の評価に依存する思考傾向がある。その為に自分の判断をすべて積極的には評価ができない。それは自分の存在に無頓着になったのではない。無頓着でいられない程に敏感でありながら、自分の存在に自信がもてない。自分の存在を強く肯定できるような気持ちになれない。自分を軽視し、無視し、あるいは悪口を言う者があれば、激怒して反撃を加え、相手を殴りつけ、怪我を負わせる程に怒るのに、自分の人格的価値や判断に自信がもてない。つまり、自己分裂になっていると言える。

目に見えない評価規準をどこにも持たないので（過去には、宗教が評価規準の役割を果たしていた）、自己分裂しているのが現代人である。自己肯定する基盤、つまり「自己肯定する枠組み」が非常に脆弱なのである。自己の存在を承認し、人格として尊重し、信じ、受け入れる能力（人格的枠組み）が失われているように見える。自分の存在を他者との比較で価値判断したり、あるいは他人の評価で、自分の存在の価値を決定する傾向が強すぎて、自分の存在を自分として肯定する機能が出来ていない。ここに現代人の自己分裂の原因の一つがある。

3 自己の回復 関係性の解決

現代人の「自己喪失」には大きく自己分裂、内面性の希薄さ、信じる能力の低下、自己否定などがあることを述べてきた。このような形で自己分裂が起きている。しかし、現代人は自己を失い、傷つき、生きる目的に確信が持

てず、それで納得しているわけではない。生きる意味や目的をもって確信をもち、かつ生き甲斐ある生を過ごしたいと願っている。つまり、自己回復することを求めている。哲学者・心理学者・社会学者なども、皆それぞれの方法を模索している。ここではスピリチュアリティの視点から、その方法について考えてみよう。

現代人が自己喪失に陥り、その苦痛からの自己回復をスピリチュアリティに求めていることは、今日の精神世界やスピリチュアル・ヒーリング関連の書物の多さから明らかである。

スピリチュアリティは、人間が物質的世界に解決の道を見付けだせない危機的状況に立つときに、触発され覚醒し、目に見えない世界（スピリチュアルな世界）に自己の存在を位置づける新しい秩序（生の枠組み）を見付ける機能である。スピリチュアルな世界は現実の世界を超越した世界であり、不変、不動の世界であるので、そこに人生の基盤や土台を回復して、人間らしい生き方ができる道を開くものである。

その際、スピリチュアリティは自分以外の起点から自分を見直す視点を持っている。スピリチュアリティが、理性や知性と異なる点は、五感で捉えるもの以外の悟り（洞察、気付き）を強調するところである。理性や知性では合理的に説明はできないけれども、信じるとか、目に見えないけれども在ると思える（悟る、洞察、気付き）というようなものである。そう思う方がより確かに思えるのは、そこに本質を洞察しているからである。そちらに自分の人生をかけてみようと思うのである。人生の選択には理性・知性以外の要因が働いている。そしてそこには神や仏などという超越的存在がいて、自分たちの事柄に関わっていてくださると思えるのだ。そんな要素をスピリチュアリティは持っている。

スピリチュアリティが超越的側面を大切にするのは、水平関係だけではなく、垂直関係で自分を見直すことができるからである。

スピリチュアルな視点は以上のように「超越性・究極性」「癒し」の視点から考えることである。このような視点は現代人の自己喪失の問題には新たな秩序（枠組み、世界）を見付け出す可能性を開いてくれる。つまり、自己

拡散・自己分裂する自己を「支える秩序」を超越性・究極性に見出し、回復（癒し）に繋げるのがスピリチュアリティである。目に見えない世界を越えた新たな秩序がスピリチュアリティの世界である。スピリチュアリティの世界は霊的世界、精神世界と呼ばれるが、単に精神的世界ではなく、超越性を特徴とする世界で、その中で癒しが起き、自己を回復する世界が生まれる。大切なのは現代人が新しい秩序との信頼関係を作ることである。「新しい秩序」の中で自分を見付け出し、自己受容し、自己肯定して、統一的自己として捉えることがスピリチュアリティの機能である。そのような道はいくつもあるが、ここでは、①超越性・究極性の問題 社会が変動する中で周りの状況によって動かない確かさ（超越性） 、②きちっとした枠組み（不変性） ③無条件な受け止め枠（愛）の3つについて考える。

3.1 超越的なもの・究極的なもの

「スピリチュアリティ」にはいろいろの側面がある。スピリチュアリティには、哲学的側面、心理的側面、宗教的側面などであるが、特に宗教的側面が強く、そのために宗教とスピリチュアリティが近い関係にあると言われる。スピリチュアリティが哲学や心理学とも関わりながら、特に宗教との関係が一番近いのは、どこに理由があるのか。その一つは、宗教には神仏などという超越的存在や究極的存在との関係の中で自己（おのれ）をとらえる視点があるからである。この超越的存在とは、人間の存在を越えるもので、人間の知性・理性・感性や欲望・欲求や個性・特性を越えて、超人間的・超物質的・超科学的側面を持ち、それゆえに無限・永遠・無私・無欲を特徴としている。その反面、人間の生命を育み、養い、支え、導くものとして理解されている。つまり、人間を愛し、労り、守るという恩寵や慈悲をもつ点が特徴である。天国・彼岸・永遠・無限・超越などという垂直の関係という新たな「秩序」を与えて人間はスピリチュアリティの視点を得るのである。人間を越える秩序の中で、人は確かさ・自由・安定を得ることになる。この「枠組み」の中に自分の存在が受け入れられ、基礎付けられるので、そこで自己の回復を見付けることがスピリチュアリティの機能である。

もう一つの要因は究極性と呼ぶもので、自分の内側に本当の自分を見付け出すというものである。自分の内側にある本当の自分は誰も知らない。自己は神秘的な存在である。未知な自己、神秘的な自己に出会うことで自己回復の道を発見するのである。

このように未知なる神秘的な自己を究極的自己と呼んで、それへの接近を望むのが人間の心理である。未知なる自己を知るとか、自己を掴むことで広がる世界は、個人を越える宇宙に通じるものである。個人の世界でありながら、宇宙と一つに繋がる。その宇宙は個人がもつ有限性・限界・脆さを超越して、自己の中にある不変な自己に目が開かれていく。無限大に広がる空間、終わることのない永遠の時間が個人のなかにもある。個人的欲望や欲求をもつことがおかしく・虚しくなるほどに無限の豊かさ。宇宙の法則や秩序の中に自分がある幸いと充実感・満足感。人間が知り、理解し、分析し、科学し、研究し、統合したこと全体が全く小さく、宇宙の広大さ、豊かさ、不思議さに比べて、人間は自分の時間・能力・所有物が小さく見え、それに固執することを止めて宇宙の一部である本当の自己の中に住むことを望むのである。このような神秘的自己との出会いが、失われた自己を覚醒し回復を可能にするのである。

「超越的なもの」「究極的なもの」との関係を作るとは、新たなスピリチュアルな世界の入口に立つことであり、超越的世界の大きさと神秘の未知の世界の深さを知ることであり、その中に身をゆだねることである。神秘的な永遠不変の世界の秩序・法則の中に自分が生きていることで得られる安らぎ・確信・希望・充実感を体験することである。人間としての有限性や限界に伴う不安や恐れから解放されて、宇宙の一部に成ることで与えられる安らぎや希望を、今、ここで、生身のままで体験することである。このような世界がスピリチュアルな世界である。

3.2 不変的なもの

スピリチュアルな世界の第1の特徴は、「超越的・究極的なもの」である。そして、そこから第2の特徴も生まれてくる。超越的・究極的なものは

人間の限界を越えるものであり、それゆえに、新たな秩序である。この秩序は、人間の世界の秩序とは全く異質の秩序であって、不変的な世界である。この世界には「表面的変化」と「内面的不変」が存在する。人間の肉体は年齢と共に変化し、社会も国家も思想も文化も芸術も人間が生み出すすべてが変化していく。時間の経過と共に人は老い、滅び、文化も、価値観も、すべてが変わり過去は人々の脳裏から忘れ去られていく。古いものは存在しなかったかのように表舞台から消えていく。この世界の変化の様子である。

人間はこのような現実を前にして、「不変的なもの」を追い求めてきた。内面的不変なものを求め、それによって人生の虚しさや不条理さを解決しようとして来た。つまり、内面的不変な世界を求めて不安や虚しさを解決しようとして来た。人間の内的世界で経験する新たな秩序では「不変」が支配する世界である。

「不変的なもの」を追い求めるのは、人間の基本的生の欲求から生じている。人間は「生まれる」「生き続ける」「生き残る」ことが生物体として基本である。この不滅への基本的欲求は精神面でも変わらず探究される。これこそ「内面的不変」の世界である。人は音楽・絵画・建築・彫刻などの作品をのこすことで、名前をのこすことができる。また、事業を起こして事業の存続する限り、創業者として社員に名前を記憶される。あるいは、学問的業績をのこすことで名前をのこす人もいる。このような方法が叶わない人でも、家族や友人など親しい人々の間に自分を忘れないで覚えていて欲しいと思う人は多い。

しかし、人はいつかは死を迎え、親しい人のことも忘れていく（外面的不変性は崩れていく）。多くの人はこの人間の厳粛な事実を知っている。事業・業績・作品・親族・友人も結局は滅びていくものである。その事実気付くと、人は人間のレベル以外のものに頼ろうとする。そこからスピリチュアルなものに目を向けるのである。スピリチュアルなものは、五感を越えたもので人間の意志・願望・能力に全く依存しない異質の世界である。人間の感覚や意志に依存しないものとは、神的なもの・超人間的なもの・超物質的なものであり、それを「第3者的なもの」「第6感的なもの」とも呼ぶこと

もできる。それらのものが存在することを信じるのである。単に理解するだけではなしに超越するものと信じ、それによって自分が守られていると信じるのである。

「不変なもの」こそ失われた自己の土台を回復し、失われた自己の回復をうける機会となる。人間が宗教に頼ろうとするのは、宗教が目に見えない神仏を対象にしていながら「不変なもの」として提示されているから信頼できるのである。

キリスト教の神も「不変なもの」として聖書には記されている。仏教でも「不滅なもの」として語られている。

キリスト教や仏教という伝統的宗教は、伝統的宗教遺産をしっかりと保存して来ているので、十分人々に「不変なるもの」を実感させてくれる。寺院の建造物もその中に置かれた仏像も、あるいは寺院建築物を包み囲む自然環境も、更に、その寺院の中での宗教行事も厳しい修行を経て得られた作法をきちんと守りながら行われている所に不変なものを見る人は多い。昔から伝えられた作法や行事が守られていることに、経典を読んだこともなく、理解しようとしたこともない人にも、スピリチュアルな感動を覚えさせるものがある。冬の厳寒に早朝から行われる修業者のお勤めは、宗教には無関心な人にも厳肅なスピリチュアルな出来事を感じさせる。そのスピリチュアリティは人間の有限さや弱さ、精神的甘えや脆さを抱えた人間が、ひたすら不変なもの、変わらないものを求めて修行する姿に現れているのである。そのような不変なものへの渴望こそ、スピリチュアルな渴望であり、人間がもつスピリチュアリティの発露といえるものである。

3.3 愛なるもの

自己分裂を防ぐ「枠組み」としてのスピリチュアリティを考える際に、此処で取り上げる「愛」の問題を通り過ぎることはできない。

スピリチュアリティが覚醒するのは人生の危機の場面であり、既存の人生の土台が崩壊し、人生を意味付け、価値付けるものを失ってしまった時である。古い枠組みは新しい秩序の到来などには確かな土台にはならない。誠実

に生きることを人生の最大目的にしている、世界規模で起きる新しい文化の到来は、新しい社会システムをもたらし、古い秩序は無力化してしまう。古い秩序が無用になった中から新しい秩序を求めてスピリチュアリティが覚醒した。新しい社会システムによって多くの挫折者が出た。

現代人は、失敗や挫折は自分の弱点をさらけ出すこととして、極端に嫌う傾向がある。現代人が失敗を嫌うのは、万が一失敗すると社会から嫌われ、弾き飛ばされることを恐れるからである。自分の存在が人から承認され仲間と認められて所属感をもつことでしか、自己の存在が確認できない現代人は、他人から軽視・無視されることに脅え、不安になっている。そこに働く論理は、自己存在の確認が他者志向である点である。そして他者志向であるがゆえに、自己コントロールができない不安を常に抱えている。他人の気分次第で、あるときには嫌われ・無視されてしまう危険性をもっている。そこで、その危険性を少なくするために現代人は「他人の顔色をうかがう」ということに多大のエネルギーを使っている。「他人の顔色をうかがう」というのは、「他人の気分をいつも気にすること」であり、「人の気分が変わらないように気を配る」ことである。他人の気分の変動はこちら側の状況に無関係に起きるので、不安と恐怖は決して絶えることはない。その上、このような生き方は、他人に向けてエネルギーを使うので、疲労させ自己分裂させ、こちら側の内面を成長させ、確立させ、自立させる方向には進まない。心の方向が外部に向かえば向かう程、自分の内的世界から離れてしまい、精神の充実・確立から遠くなっていく。特に、人生の危機に直面し、状況を正しく分析し判断が必要な時、自己分裂している為に自分をもて余すことになる。

このような状況の中で、人はスピリチュアルな世界を求め始める。自分が傷つき、人から見放されたときにも、自分を受け止めてくれるスピリチュアリティの愛の世界を求める。それは人間の限定された「愛」ではなく、「無限の無条件の愛」を探し始めるのである。ここでの「愛」は人間の愛のように条件付きではない。それは、「無条件の愛」であるので、「天から与えられる」「彼岸から」与えられる愛である。

人が失敗し挫折するのは避けられない。また、人から嫌われることも受け

入れられないことも避けられない。失敗すること、挫折することに不安と恐怖を持っている現代人が心底求めているものは失敗し挫折したときにも、見離さず、軽視せず、人格として認め、受け入れてくれるものである。軽視・無視・孤独を恐れるので無条件にいつでも迎え入れ、人間として扱ってくれる愛を求めている。そのようなものは母の愛を除いてはないが、広大な自然や大海原も一見そのようなものとして映る。しかし、そのような自然も海原も地震や台風などのように凶暴な生きものと豹変することもある。つまり自然も海原も一時的慰めにはなっても、傷ついた者を常に変わらず受け入れ、癒すものにはなれない。

先にスピリチュアリティと宗教が近い関係にあることを述べた。人がキリスト教に期待するものは、決して変化することのないイエス・キリストの愛かもしれない。またキリスト教が伝える愛は、神の愛がイエス・キリストの十字架において現わされていたと説いている。キリストの十字架という犠牲が示すものは、私達人間を決して裏切らないという証しである。単に、言葉だけの愛ではない。十字架の死を敢えて引き受けたことで、誠実に人間への愛を具体化したことを示している。現代人が愛の真実性を問う時、十字架という犠牲がすでに支払われて、愛の確かさが具体化されている点は危機にあって確かな愛を求めるものを支えるものである。

キリストの十字架の愛への関心は現代人の中にも強くある。にも拘わらず、キリスト教の団体には警戒心をもっている。そして、現代人はスピリチュアルな援助を求めている。伝統的キリスト教や仏教への関心は減少傾向にあり、その代わりにスピリチュアリティへの関心は高まっている。スピリチュアルなもの「超越性」や「癒し」を特徴とし、かつ超越性の中には人格的「愛」の要素が含まれている。つまり、スピリチュアルなものというのは、失敗し挫折した現代人を、そのまま包み受け入れてくれる愛である。能力や能率が重視されて人間自身の価値が軽視される時にも、人格としての価値を認め受け入れてくれるような愛である。このような愛に支えられることで喪失した自己を回復することが出来る。その愛は癒しを与えるものであるし、人間の条件付きの愛とは異なる無条件の愛で、超人間の起点から与えら

れるものである点で、スピリチュアルな世界からの愛である。

4 むすび

4.1 スピリチュアリティと「癒し」

現代人の自己喪失とスピリチュアリティの関係について述べてきた。現代人が喪失した自己を抱えて確かな自己を回復しようと探求求めている。今日スピリチュアル関連の書物、音楽、絵画、映画に関心を寄せている理由はいわゆる自己回復の為に「癒し」を求めているからと言える。スピリチュアルな音楽といわれるものは、単調な音が静かに流れ心地よさを与えてくれる。また、スピリチュアルな絵画とは、広びろとした大自然に太陽の光が暖かく射して疲れた現代人の生命を蘇えらせてくれる。これらの音楽も絵画も自然も、人は大きな生命や秩序の存在を感じ、その中に自己が包まれることで、見失った人生の目的を原点に立ち戻って再確認させてくれる。原点に立ち戻ることで見失った自己と再会するという「癒し」を経験するのである。

このような静かな音楽や無限に広がる自然は非日常的な現実であり、一つの宗教的な神秘体験でもある。日常では忘れていた生命の無限さや偉大さや確かさを体験する。その体験は人間の最も根源的なものであるのにも拘わらず、日常の生活では忘れ去られている。このような非日常的な出来事は、超越的なもの（天国・彼岸・永遠・無限など）との出会いによって気付かされるもので、スピリチュアルな出来事として経験されるのである。

4.2 スピリチュアリティと「自分らしさ」「人間らしさ」

スピリチュアリティとは「超越的・究極的なもの」との出会いによって生まれるもので人間に新しい秩序、つまり「存在の枠組み」が生まれることである。そして、その枠組みの中にある自由や愛に支えられて癒しが生まれてくる。自分の人生の意味・目的が明らかになり、自分らしさが回復してくる。ここでは今、ここに生きている実感と共に、未知なる将来にも確かに自分を支えるものを実感する。自分の生命が宇宙の生命でもあることで得られ

る平安や歓喜がある。自分の誕生には宇宙の摂理があると信じられて、今、ここに深く生き、かつ委ね切った自由と平安がある。そこから「自己回復」というべき「人間らしさ」「自分らしさ」の回復が起きてくる。スピリチュアリティがもたらす新しい生の秩序・生の枠組みが現代人の魂の癒しをもたらすこととなるならば、それは自己回復といえる。

参考文献

- 窪寺俊之, 2000, 『スピリチュアルケア入門』東京: 三輪書店.
 , 2004, 『スピリチュアルケア学序説』東京: 三輪書店.
 谷山洋三・伊藤高章・窪寺俊之, 2004, 『スピリチュアルケアを語る: ホスピス、
 ビハラの臨床から』西宮: 関西学院大学出版会.
 Rollo, May, 1953, *Man's search for himself*, New York: W.W. Norton. (= 1995, 小野
 泰博・小野和也訳『失われし自己をもとめて』東京: 誠信書房.)
 Riesman, David, 1955, *The lonely crowd; a study of the changing American character*,
 New York: Yale Univ. Press. (= 1955, 佐々木徹郎・鈴木幸壽・谷田部文吉共訳
 『孤独なる群衆』東京: みすず書房.)
 梶田勲一, 1998, 『意識としての自己』東京: 金子書房.
 梶田勲一編, 2002, 『自己意識研究の現在』京都: ナカニシヤ出版.
 中村元, 1980, 『自己の探究』東京: 青土社.
 鎮目恭夫, 1999, 『人間にとって自分とは何か』東京: みすず書房.
 木村敏, 1982, 『時間と自己』東京: 中央公論社.
 大嶺顕, 2005, 『宗教の授業』京都: 法蔵館.
 Erikson, Erik, Homburger., 1968, *Psychological issues identity and the life cycle*, New
 York: International Universities Press. (= 1982, 小此木啓吾訳『自我同一性:
 アイデンティティとライフ・サイクル』東京: 誠信書房.)
 K. リーゼンフーバー, 1995, 『内なる生命 霊的生活への導き』長崎: 聖母の騎
 士社.
 K. リーゼンフーバー, 2004, 『超越に貫かれた人間 宗教哲学の基礎づけ 長崎
 純心レクチャーズ(第6回)』東京: 創文社.
 井上俊・船津衛編, 2005, 『自己と他者の社会学』東京: 有斐閣.
 日本哲学史フォーラム編, 2005, 『特集 自己・他者・間柄 日本の哲学(第6
 号)』京都: 昭和堂.
 和田渡, 2005, 『自己の探究; 自己とつきあうということ』京都: ナカニシヤ出版.
 ゴードン・マーセル監修= 青山学院大学総合研究所訳, 2006, 『キリスト教のスピ
 リチュアリティ その二千年の歴史』東京: 新教出版社.

Personal Loss and Spirituality

- Seeking the Self

Toshiyuki Kubotera*

Abstract

This paper examines the relationship between personal loss and spirituality among modern people, and further considers the road to happiness for modern people. At present there are several social issues associated with the concept of personal loss, and we seek a path to their solution. Underlying issues that include suicide, homicide, social withdrawal and psychological illness we find the rapid changes taking place in society, an overload of information, and diversifying values, in which we believe it is possible for one to lose one's sense of self. This essay clarifies the relationship between such personal loss and spirituality, and considers the road to a recovery of the self.

Although the causes of personal loss have been considered from a variety of angles, our focus here is psychological, with a consideration of the following four perspectives: 1, a loss of self-focus, 2, a weak sense of one's internal identity, 3, a decreased capacity for faith and 4, a tendency to self-negation.

These involve the issue of self-recovery (healing), which can be said to be covered by spirituality. Spirituality functions to heal the self by identifying a new order (a life framework) within an invisible world (beyond time and physical dimensions) in which the self exists. It opens the possibility to recover from personal loss and thereafter lead a more human life.

For our purposes I have distilled three points whereby spirituality offers a new ordering: 1, the issue of its transcendental nature and its sublimity, 2, the clarity of its framework and 3, its capacity for unconditional acceptance.

Modern people are beginning to return to spirituality. They seek the certainty

and freedom available from a connection with spiritual reality.

Key words: personal loss, spirituality, a new order to a life, comfort, sense of self